

A 語句の意味と読み

(1) 読み=ちゃくし／意味=家を継ぐべき正式な跡取りの子。ここでは正成の長男・正行を指す。／「嫡」は正妻の子・本すじの意。「庶子」と対になる語

(2) 読み=ていきん／意味=家庭での教え。親が子に与える教訓。／「庭」は家庭のこと。ここは正成が正行に残した最後の教え

(3) 生まれつきの素質・資質。ここでは獅子としての才能。／本文の「教へざるに中より跳ね返りて(=教えなくても落ちる途中で跳ね返って)」ことができる、そのもとなるもの

(4) まして。まして～は言うまでもない。／★軽いもの(獅子の子)をあげて、重いもの(人であるおまえ)を強める抑揚の言い方

(5) 読み=たがふ(現代仮名遣いでは「たがう」)／意味=そむく。従わない。／現代語の「ちがう」ではなく「教えにそむく」の意

(6) 読み=あんぴ／意味=無事かどうか。ここでは、世の中が治まるか乱れるか、天下の存亡ということ。／「この一戦、天下の安否と思ふ」=この一戦に天下の運命がかかっている

(7) 主君に仕える若い家来・武士。／「一族(血のつながった者)」と「若党(家来)」を並べて、味方が残っているかぎり、と言っている

B 文法

(8) 意志(～しよう)／終止形。「帰し遣はさんとして」で「帰らせようとして」の意。／「～んとて」は「～しようとして」。引用の「と」の上なので終止形

(9) 存続(～ている)の助動詞「り」の終止形。〈完了・存続〉の「り」のうち、ここは存続で「～と言いつづけている」の意になる。「り」の接続を、四段動詞の已然形とする教科書と命令形とする教科書があるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／「いへ」は四段動詞「言ふ」の形。「り」はサ変と四段にしかつかない

(10) 完了(～しまった・もう～した)／終止形。決め手=直前の「あまり」が連用形だから。打消の「ず」の連体形「ぬ」なら未然形につくので「あまらぬ」となる。／★「ぬ」の識別は接続で決める。連用形+ぬ→完了、未然形+ぬ→打消「ず」の連体形

(11) 形容詞「なし」の命令形。「～事なかれ」の形で「～するな・～してはいけない」という禁止を表す。／「～する事なかれ」はそのまま禁止の決まった言い方として覚えてよい

(12) 未然形+「ば」で順接の仮定条件を表す。「もし(討ち死にしたと)聞いたならば」の意。／★未然形+ば=仮定(もし～たら)、已然形+ば=確定(～ので・～と)。「聞か」は未然形

(13) 「べから」=当然の助動詞「べし」の未然形、「ず」=打消の助動詞「ず」の終止形。「べし」+「ず」で「～てはならない」という禁止を表し、ここは「(降参するようなことが)あってはならない」の意。／★ここでの「べからず」は禁止(～てはならない)。「べからず」は文脈によって「～できない・～はずがない」の意にもなるので、前後で決める。⑦の「なかれ」と同じ禁止のなかま

(14) 「に」=完了の助動詞「ぬ」の連用形。「けり」=過去の助動詞「けり」の終止形。(ここは詠嘆をこめて読む説明の教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。)「別れてしまった」と、二度と会えない別れを語り収めている。／★「に」の識別=下に「けり・き・たり」など助動詞が続く「に」は完了「ぬ」の連用形。断定「なり」の連用形ではない

C 主語・指す内容

(15) 主語=獅子の子。石壁から投げ落とされた獅子の子が、生まれつき素質を備えているので、教えられなくても落ちる途中で自分から跳ね返り、死なずにすむということ。／「その子」=獅子が産んで三日目に投げ落とした子

(16) 正行。「正成すでに討ち死にすと聞かば」は、正成が我が子正行に向かって「私が討ち死にしたと(おまえが)聞いたならば」と言っている言葉である。／★正成が正行に言い聞かせている場面。「汝」と呼びかけられている側が、聞く人

(17) 足利尊氏。／★正成が兵庫へ迎え撃ちに行く相手。ここを後醍醐天皇と取りちがえない

(18) 一族や家来が生き残っているかぎり金剛山にこもって戦い、養由基の矢の前に身をさらすように命を惜しまず、紀信の忠節になぞらえて忠義を貫きとおすこと。／直前の⑫～⑭の言いつけが、そのまま答えになる

D 口語訳

(19) その子には獅子としての素質が備わっているので、教えなくても落ちる途中で身をひるがえして跳ね返り、死なずにすむという。／「中」=空中・落ちていく途中。「得ず」=～できない。★「あれば」は已然形+ば=「～ので」(そういうものはいつでも、の意)。仮定の「あらば」ではない。⑨「聞かば」(未然形+ば=もし～たら)と比べる

(20) まして、おまえはもう十歳を過ぎている。／「いはんや」=まして。「あまりぬ」=過ぎてしまった(「ぬ」は完了)

(21) そうであっても、ほんの一時の命を助かりたいために、長年の忠義を捨てて、降参して敵に身を投じるようなことが、あってはならない。／「しかりといへども」=そうであっても。「一旦の」=ほんの一時の

(22) 一族や若い家来が一人でも生き残っているような間は、金剛山のあたりに立てこもって。／「たらん」=生き残っているような。「引き籠る」=立てこもる

E 内容・記述

(23) 獅子の子でさえ、生まれつき素質が備わっているの、教えられなくても自分の力で死をまぬかれる。それを先にあげたうえで「いはんや（まして）」と続けることで、十歳を過ぎた正行なら自分の力で生きぬき、父の教えを守るはずだと強く言うため。／★軽いものを先にあげて重いものを強める言い方を抑揚（よくよう）という

(24) この一戦に天下の安否（世の中が治まるか乱れるか）がかかっていると考え、自分は死を覚悟していたので、跡取りである正行を生き残らせて、自分の教え（忠義）を継がせようとしたから。／「天下の安否と思ふ間、汝を、これより歸しつかはすなり」が直接の手がかり

(25) 父のそばに残って一緒に死ぬことが孝行なのではなく、生きのびて朝廷への忠義を最後まで貫きとおすことこそが第一の孝行だという、忠と孝を一つに重ねた武士の生き方が主題である。／★「親孝行」を家族の情でとらえると外す。「忠＝孝」と言い切っているところが山

F 文学史・故事（本文全体をふまえて答える）

(26) 中国・春秋時代の楚の弓の名手、養由基。百歩離れた柳の葉を射抜いたと伝えられ、「百発百中」の故事で知られる。ここは、その名手の矢の前に身をさらすように、命を惜しまず戦えという意味で引かれている。／★「養由のように弓が上手になれ」ではない。命を惜しむなという意味

(27) 漢の高祖（劉邦）の忠臣。項羽の軍に囲まれたとき、主君の身代わりとなって敵中に出て高祖を逃がし、自分は命を落とした。ここは、その紀信の忠義になぞらえて忠義を尽くせという意味で引かれている。／★養由＝命を惜しまぬ勇、紀信＝身代わりの忠。二つが対句になっている

(28) 軍記物語。後醍醐天皇の倒幕から南北朝の動乱までを描いた全四十巻の作品で、南北朝時代（十四世紀後半）に成立したとされる。作者は未詳。／『平家物語』とならぶ軍記物語の代表作。この場面は巻十六、湊川の戦いの直前にあたる

【現代語訳（全文）】

正成は、兵庫へ下って行ったが、（その途中の）桜井の宿から、嫡子の正行を（故郷の）河内へ帰らせようとして、泣きながら教え（庭訓）を残した。その言葉は、「獅子は子を産んで三日たつと、数千丈もある高い石壁の上から、その子を投げ落とす。その子には獅子としての素質が備わっているの、教えなくても落ちる途中で身をひるがえして跳ね返り、死なずにすむという。まして、おまえはもう十歳を過ぎている。（私の）この一言が耳にとどまるならば、私のいましめの教えに背いてはならない。

この一戦に天下が無事であるかどうかがかかっていると思うので、おまえを、ここから帰らせるのだ。この正成がもう討ち死にしたと聞いたなら、天下は必ず將軍（足利尊氏）の世になってしまうと心得よ。そうであっても、ほんの一時の命を助かりたいために、長年の忠義を捨てて、降参して敵に身を投じるようなことが、あってはならない。

一族や若い家来が一人でも生き残っているような間は、金剛山のあたりに立てこもって、敵が攻め寄せて来たなら、（弓の名手）養由基の矢の前に身をさらすように命を惜しまず戦い、その忠義を（漢の忠臣）紀信の忠節になぞらえよ。これをおまえの第一の親孝行だと思え。」

正成は、涙を押さえて、泣きながら（正行に）よく言い聞かせて、父と子はそれぞれ東と西へ別れたのだった。